

マインドと瞑想についての詩節 III
『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』 第 362 節

一体性の至福

निरन्तराभ्यासवशात्तदित्थं
पक्वं मनो ब्रह्मणि लीयते यदा ।
तदा समाधिः सविकल्पवर्जितः
स्वतोऽद्वयानन्दरसानुभावकः ॥

*nirantarābhyāsaśāttaditthaṃ
pakvaṃ mano brahmaṇi līyate yadā |
tadā samādhiḥ savikalpavarjitaḥ
svato 'dvayānandarasānubhāvakaḥ ||*

揺るぎない修行によって成熟したマインドが
絶対なる者に融合すると、そこにはサマーディがある——
それは[すべての]概念を超える瞑想への深遠な没頭であり、
人はそこでおのずと一体性の至福を味わう。



© 2023 SYDA Foundation®. 著作権所有。

『ヴィヴェーカ・チューダーマニ（識別の宝玉）』は、8世紀にインド全土でアドヴァイタ・ヴェーダーンタの教えを紹介した尊敬されている賢人、アーディ・シャンカラチャーリヤが書いたと考えられています。多大な影響力を持つ哲学の文献であるこの教典は、人の最も奥の大きな自己は、絶対なる者と一体である——それ故に、本質的に完全であるという、中核となる教えを解説しています。それはまた、瞑想を揺るぎなく実践することを通して、探究者がこの喜びに満ちた体験をいかに達成するかを述べています。マインドは、ひとたび静まると、真の自己の中で休息するようになるのです。

Vivekachudamani, v. 362; trans. Swami Madhavananda, *Vivekachūdāmani of Śri Śaṅkarācārya*, 8th ed. (Calcutta: Advaita Ashrama, 1970), p. 137.